

## “The Pupil”における“インナーチャイルド” のテーマ

西田 智子

### 序

Henry Jamesの小説においては、実質的な保護者を失い、いわゆる「子供らしく」生きることが叶わない子供の姿がしばしば描かれる。例えば*The Turn of the Screw* (1884)のMilesとFlora, *What Maisie Knew* (1897)のMaisie, そして“*The Pupil*” (1891)におけるMorganらは、いずれも多くの大人に囲まれながら、大人に支えられ導かれるというよりは孤立した立場から大人達に何らかの影響や教唆を与える子供として描かれている。こういった子供たちの存在によって浮き彫りにされるのは、大人達の腐敗やおろかさ、弱さといったものであると言えよう。さらに、このような子供達は直感的に大人の弱点を見抜く感受性を持ち、この感性は大人より優れる。そしてこのような弱さに敏感でそれを嫌悪する子供は、生きる力や情熱において大人より強者であると言える。しかし、人間のもつ弱さを全否定する純粋さを持っていては、現実の大人の社会の中を生き、年齢を経験を重ねることはできないこともまた明らかである。すると「大人」とは、子供が備える強い感受性を失っていったからこそ成り立つ存在とも考えられる。生きる力の強さと感受性において、子供は大人の父たる存在であるという側面がありながら、<sup>1</sup>大人は自らが子供であった頃の鋭い感受性の記憶に時に教唆を受けながらも現実の人生に耐えられない純粋さを失っていくことになる。

“*The Pupil*”に登場する少年Morganは、家庭教師としてMoreen家へやってきたPembertonの視点から、時に早熟に見えたり、若いPembertonを不安に思わせるほど賢く思えたりする子供として描かれる。彼はまた、「知らぬ外国語で書かれた本のページのように皆目見当がつかなかった」(as puzzling as a page in an unknown language, 192)<sup>2</sup>とか、「翻訳するのに相当の熟練を要する神秘の書」(the whole mystic volume in which the boy had been bound demanded some practice in translation 192)のようだと描写される。Pembertonにとっては未知の世界であるMoreen家の雰囲気や人々についても、当然ながらMorganの方が熟知しており、彼はPembertonに対するMoreen家の仕打ちも予測し、Pembertonにそれを教える立場となる。Moreen家での人生経験という点においてはPembertonの方がMorganが与えてくれる知識を

吸収していく「生徒」であると言えよう。

また時に様々な夢を抱き、Pembertonと将来のための勉学に打ち込んではいても、最後にはMorganはわずか15歳で亡くなることになる。つまりMorganはいわゆる大人へと成長していくための一段階としての子供ではないと言える。彼はその年齢において完成した一つの感性の体現者であり、大人からすると、かつて子供であった時には備えていたが現在は失われた、生きることへの独特の洞察や感受性を呼びさましてくれる引き金としての存在ともなる。この意味においてMorganは大人の視点から観られた、自己に存在する過去の自分の能力を象徴することになり、精神医学上の問題に対処する際に使われる用語である、“インナーチャイルド”に相当する役割を担う。インナーチャイルドと出会うことは、過去の自分に出会う作業であるとされる。Morganの感性に教唆を受けて未知の他者の生き方に対する見る目を養うのはPembertonであり、Moreen家での扱われ方については文字通りMorganから教えられることになる。*What Maisie Knew*や*The Turn of the Screw*における子供達と同様、Morganは学校に通うことで複数の同世代の子供達と交わってその中で自分を相対化する経験を持つことがなく、家庭教師であるPembertonと一対一の対話によって学ぶという閉鎖的な教育環境に置かれている。このような閉鎖空間における教師と生徒との対話は、一つの自己の中における異なる世代の視点間の対話のメタファーとして捉えることができまいだろうか。PembertonはMorganを通じて自らのインナーチャイルドの声によりMoreen家の腐敗を直視する力を与えられる。

さらに、Pemberton自身が、書物によって得られた知識においては確かにMorganより上であり教師という立場ではあるが、働くことも初めてで、未経験で純粹、世間知らずな世代にあると言える。彼が家庭教師としての仕事に取り掛かる際に、教え子が自分よりも賢いことを怖れたり、Mrs. Moreenの態度に不満を抱きながらも子供に親の悪口を言うべきではないとする教師らしさを意識的に身に付けようとする様子には、彼が教育を「受ける」学生の立場から、教育を「施す」立場への過渡期であり、子供から大人へと移り変わるその中間点にいたことが読み取れる。そしてPembertonがMorganと年齢や立場を超えた共感を得て絆を感じる時には、二人の純粹さとそれに対するMoreen家の人々の暮らしの空しさという対立構造が浮かび上がってくる。つまりPembertonもまた彼より「大人」の視点から見られた一つのインナーチャイルドを体現するのである。彼が体現するインナーチャイルドの声は、子供が持つ鋭敏な直観力と強い自我を、大人として生きるために抑えていく際の葛藤の声であると考えられる。

このようにMorganとPembertonは世代は違うもののそれぞれが、二人が持つ感性

をかつて経験している視点から見られたインナーチャイルドの声を体現する。すると二つのインナーチャイルドの声は、Moreen家の大人とも違う別の「大人」の存在，すなわち，二人の感性を内に備え，より可視性に富む立場からインナーチャイルドと大人の社会のふれあいを見つめる視点の存在を示唆していると考えられるのである。MorganはPembertonから，Pembertonは第三のより「大人」の視点から見つめられる。この作品において多重の視点技法が特徴的であることについては，Helen Hoyも，“Speaking, in his Preface to “The Pupil,” of its narrative method of revealing not the Moreens but Morgan’s troubled vision of them reflected in Pemberton’s troubled vision, James acknowledges his addiction to seeing one thing through another and still others through that. . . .”(Hoy, 37) と述べている。そして多重の視点の先に存在するものの意味についてこれまでほとんど議論されてこなかったと言える。

本稿では，MorganやPembertonがそれぞれより「大人」の視点のインナーチャイルドとしていかなるメッセージや教唆を送り出しているのかということを検討することを通して，James文学における「保護者」を持たない子供という存在の意義，さらにはインナーチャイルドが出すメッセージによって照射される「大人」という存在の意味について考察していきたい。

## I

Morganはどういった特徴を持つゆえに大人のインナーチャイルドとなるのだろうか。大人に影響力を及ぼす彼の特異性についてまず考えたい。Pembertonの視点から見られたMorganは，「利発」(“intelligent” 189)で「皮肉な顔が，その時々でおとなびて見えたり子供じみて見えたりする」(“his small satiric face seemed to change its time of life.” 189)と描写される。家族の中ではMorganは皆から可愛がられているというのにどこか敬遠されているという矛盾した面をもっている。この様子は次のような描写からも読み取れる。

... they were wonderfully amiable and ecstatic about Morgan. It was a genuine tenderness, an artless admiration, equally strong in each. They even praised his beauty, which was small, and were rather afraid of him, as if they recognized that he was of a finer clay. They called him a little angel and a little prodigy and pitied his want of health effusively. (193)

But mixed with this was the oddest wish to make him independent, as if they

felt that they were not good enough for him. (194)

It was strange how they contrived to reconcile the appearance, and indeed the essential fact, of adoring the child with their eagerness to wash their hands of him. (194)

またMorganが発作を起こして息をきらせている時には、Mrs. Moreenはわが子であるというのにまるで神聖な偶像に対するように手を触れようとしない。

“Now do you say he’s not ill—my precious pet?” shouted his mother, dropping on her knees before him with clasped hands, but touching him no more than if he had been a gilded idol. (218)

さらにMorgan自身も家族とは好みや気質が異なり、超然としたところがあり、家だけの通用語といわれる「ウルトラモリーン」(“Ultramoreen” 193)を使うこともない。さらに彼は子供らしい冗談を言って無邪気な面を見せる時もありながら、Pembertonが彼の手前Moreen夫妻のことを「良い人」達だと言った時には、「先生の嘘つき！」(“You are a humbug!” 196)と言ってPembertonを赤面させるような皮肉で辛らつな洞察を見せる。

このように大人から見られたMorganは、時に神聖な天使のようであり、また時に大人をどきりとさせる悪魔のようでもある。そして子供の見える悪魔性こそが大人達に何らかの教唆や警告を感じさせると考えられるのである。例えば*The Turn of the Screw*における家庭教師は、天使のような外観を持つ子供達が自分たちの秘密を守ろうとする際に見せる狡猾な作為にどきりとし、表層的な平和の幻想を完全に失うことになる。また*What Maisie Knew*においては、大人達が吹き込む勝手な知識を誰に対しても悠然と隠すようになったMaisieに対し、大人達は彼女の顔色をうかがったり、不安を覚えることになる。フロイトによると人間の持つ悪魔性は無意識に抑圧された敵意である可能性があると言われる。<sup>3</sup> Morganが見せる悪魔性もまた、真実を直視し口に出そうとしないPembertonや、虚飾にまみれた暮らしを子供に批判されることを恐れる家族に対する、時に皮肉を伴う批判であると考えられる。

次にMorganの家庭環境および教育環境の特異性に注目することにより、彼が保護され教育されることによって育っていく子供ではないことがより明らかとなる。子供が成長するために必要となる基盤が完全に信頼できる家庭であるとするならば、Morganが孤立感を持つMoreen家は彼を助けて育む機能を果たしていない。アダルトチルドレンと家族の関係や、インナーチャイルドとの出会いによる精神治療について研究する斎藤学氏は、子供を育む役割を果たすことのできない「機能不完全家族」を次のように定義する。<sup>4</sup>

1. 強固なルールがある
2. 強固な役割がある
3. 家族に共有されている秘密がある
4. 家族に他人が入り込むことへの抵抗
5. きまじめ
6. 家族成員にプライバシーがない
7. 家族への偽の忠誠
8. 家族成員間の葛藤は否認され無視される
9. 変化に抵抗する
10. 家族は分断され統一性がない

このような条件をそのままMoreen家に当てはめることはもちろんできないが、このような家族の状況とMoreen家の状況にはいくつかの類似点が見出せる。例えばMoreen家では経済的にかなり困難であるにもかかわらず、表向きは優雅に余裕のある暮らしを装い、内緒話には「ウルトラモリーン」を使い、家庭の実情を外部に漏らさないことが家族に共有されたルールであり秘密と考えられる。家庭の実情を隠したまま家族とは毛色の違う気質を持つMorganをPembertonに押し付けるのも、家族に異分子や他人が交じることへの抵抗であろう。またこの一家の大人達は、上流階級の人々と交わろうとやっきになっているために礼儀作法や娘達の行動に対して厳格な家庭を装う一方、平気で嘘をつき、結局は上流階級からは相手にもされないのでは目的を遂げることかできず、家族の生き方には何の誠意も実質もない。彼らはてんでに虚飾を追い、住む場所においても行動においても何の統一性もないと言える。そしてMorganが家族の生き方に対して抵抗を感じ恥じる気持ちは当然無視されている。

このようにMorganは彼を「育む」基盤となる家庭を持たない。また子供の本格的な発達には、子供が自ら外に向かって積極的に冒険を求めて動いていくことであるとすれば、Morganの教育環境は非常に閉鎖的であり、彼は文字通り外に出ない子供と言え、ピアジェ(Piaget, J)が唱えるような、精神的な発達を得るための新たな環境への適応が望めない状態である。<sup>5</sup> Morganが生きる世界はまさに彼の家庭内に限られ、彼はその限られた情報源を深く見つめることで人生の経験を、とりわけ人間性に潜む腐敗に対する洞察を得、彼の成長は止まっている。言い換えれば彼は一つの変わることのない完成された視点と感性を持つ。またPembertonはMorganが学校へ行かないことのメリットを、学校生活の中で平凡になることもなければ賞状をもらって自分の才能を鼻にかけることもないのでいつまでも無邪気な面白い子のままでいてくれることであると考えるが、これはあくまでもPembertonにとっての利点であることに注目した

い。つまりMorganは大人から知的刺激を与えられる側ではなく逆に大人に対して刺激や影響を及ぼす存在であることが明らかとなる。

また、Morganの「才能」という点に注目すると彼が「インナーチャイルド」としての役割を担うことがさらに明らかとなる。彼が聡明で才能のある子どもであることは、“He’s a genius. . . .” (190) と語るMrs. Moreenをはじめ、皆が認めるところであるが、彼に備わる才能というのがいったい何をするための才能であるのかというのが漠然としている。このように漠然とした「才能」豊かな人物はJamesの作品においてしばしば見かけられることに気づくことができる。例えば*The Portrait of a Lady* (1881)における娘時代のIsabelは皆から「才能の豊かさ」を認められるものの、ただ人生を自由に傍観することに憧れるだけで、実際には彼女の才能は何をするための才能であるのかは明らかではないと言える。特にMorganはわずか15歳で生涯を閉じることになるため、彼の才能は彼自身の将来に役立つものではないことがわかる。彼の才能は大人が何らの影響を受ける対象としての価値を持つのであり、大人から受けとめられ、読み解かれるメッセージを体現すると考えられよう。

このようにMorganは自らが成長していく子供というよりは大人のインナーチャイルドとなる傾向を備えている。だがこうした「大人」にはMoreen家の大人達は含まれないものと考えられる。つまり、MorganはPembertonと好意を持ち合い彼に影響を及ぼすのだが、Moreen家の人々は彼を理解することができず、MorganとPembertonはMoreen家においてはいわば異分子であることが分かる。するとMoreen家の大人達はMorganやPembertonをインナーチャイルドとする大人ではないということになり、Moreen家の大人達とは別に、二人と共通する感性を備えた第三の「大人」の視点が存在するという可能性が示唆される。

MorganはPembertonのインナーチャイルドとしてどのような働きをするのだろうか。Pembertonは子供が大人の間関係に介入するべきではないと言いつつ、実際に思っているのだが、確実にMorganの判断や指摘に導かれてMoreen家に対する洞察を得ていると言える。働くことも初めてであるPembertonが、Moreen家の人々を国際人であり、彼らと触れ合うことは新しい人生に触れることであると考えたのは、彼にとって未知の世界が自分に有益なものであってほしいと思う気持ちが働いたためであろう。しかし彼が未知の世界に隠れた腐敗を判別することができたのは、“How do I know you will stay? I’m almost sure you won’t, very long.” (195) とか、“Well, at any rate you’ll hang on to the last. . . . Till you’re fairly beaten.” (196) というMorganの予言によって呼びさまされた、Pemberton自身のインナーチャイルドが備える感性の導きであると考えられる。結局Pembertonは、“. . . they [Moreens] were

adventurers because they were abject snobs.” (200) という結論に達して現実をどう切り抜けるかという問題に直面せざるを得ない。MorganはPembertonのインナーチャイルドとして、彼に新しいより醜悪な現実への対処策を示唆することとなる。

特にMorganによって呼び起こされたのはPembertonの自信と勇気であろう。この様子は給料の支払請求をめぐるPembertonとMoreen家の大人とのいきさつにおいて読み取ることができる。なかなか給料を支払ってもらえないPembertonを子供ながらも心配するMorganは、生意気と言われてもPembertonにアドバイスする際に、“I’m not afraid of the reality.” (202) と涙まで浮かべてPembertonの立場から考えようとする。Pembertonは一応はMorganに大人の事情に立ち入らせない姿勢を見せはするものの、結局Morganの熱心さによって、次の日にMoreen夫妻に給料の支払いを堂々と請求する自信を導かれていると言えよう。このPembertonの態度は次のように描かれる。

The next day, after much thought, he took a decision and, believing it to be just, immediately acted upon it. He cornered Mr. and Mrs. Moreen again and informed them that if, on the spot they didn’t pay him all they owed him, he would not only leave their house, but would tell Morgan exactly what had brought him to it. (202)

ここにおいてPembertonは見違えるばかりに断固とした態度で雇い主に接していることが読み取れよう。Morganが体現する強い正義感によってPembertonは自信を得ているのである。そして一時的に給料を払ってくれたもののその後無報酬でPembertonを働かせようとするMrs. Moreenに、Pembertonはそれがゆすりであることを皮肉を込めてなじり、彼女をぎょっとさせさえる。つまり、子供の強い感受性を持つ、悪魔的とも言える力を表すインナーチャイルドの導きにより、Pembertonは大人の気持ちを操作する力と存在感を発揮していることが分かる。

Pembertonは自らの中に眠るインナーチャイルドを突き放すのではなく、それを受け入れることで未知の世界に対する洞察を深めるのだが、そのような彼の視点によって、「大人とは何であるか」という問題が前景化されていく。PembertonはMorganに大人の事情を漏らすことなく教師と生徒としての関係を保とうとするのだが、逆にMorganに、“My dear fellow, you’re a hero!” (206) と褒められ、まるで上の立場からその姿勢を評価される場面もある。そして実質的に大人の事情を隠せなくなったPembertonに対するMorganの、“We must be frank, at the last; we must come to an understanding.” (208) という宣言は、Pembertonの、自らのインナーチャイルドへの回帰と融合を示唆すると考えられないだろうか。Moreen家の腐敗に負けない強

さを持つようになつたPembertonにとって解明するべき次の未知の問題は、インナーチャイルドの感性によつても分からない問題であり、Morganのことばでは、“I don't know what they [Moreens] live on, or how they live, or why they live!” (208)と語られる。このMorganの叫び、つまりPembertonのインナーチャイルドの叫びは、Moreen家の大人達の生の存在の意味そのものに対する問いかけである。こうしたMorganとPembertonが抱く疑問は、彼らをインナーチャイルドとするさらに「大人」の視点への叫びとなつていくと考えられるのである。

## II

次に、Pembertonの方はより「大人」の視点に対するいかなるインナーチャイルドとなっているのだろうか。PembertonはMoreen家の大人たちからは「子供」扱いされて利用され、Morganに対しては「大人」として接するよう努めるという二種類の立場と経験の上に立っている。彼はMorganと違ってある時点において成長を止められることなく、今後確実に「大人」になっていく青年である。彼は子供であるMorganと共感しながらも、日々より「大人」の世界へ、未知の世代へと年齢を重ねていく、読者を含めた人間の心理を体現すると考えられる。

Pembertonは教師であるという立場上、「子供」であるわけにはいかず、またMoreen家の「大人」の世界に対しては未経験な子供であるという中間的な立場にあり、かつ孤独な立場でもある。このため彼が感受するものは、「大人」でないことと、「大人」であることの両方の恐怖であると考えられるのである。まず彼は初めての教え子が頭が良さそうで生意気な印象であることと、理解力において教え子が自分を上回るかもしれないという思いに脅威を感じている。とりわけ、いくらMorganとMoreen家の醜態について暗黙の相互確認を得ても、Morganに彼の両親についての不満を悟られることをPembertonは一貫して回避し、自分が「教師」としてまた「大人」としてMorganに接することができなくなることを怖れていると考えられる。

さらにMoreen家の大人達に対しては、Pembertonは自分が「大人」扱いされず、Morganとともに異分子と見なされ、一家の都合に利用されることを怖れる。Pembertonは自分が世間知らずであることや、実際にはMoreen家に頼るしかない経済的な無力さ、あるいはMorganに情が移ってしまっている感傷的で優柔不断な自分の軟弱さに常に引け目を感じていると考えられる。自己嫌悪に陥るPembertonの様子は次のように描写される。

It descended upon Pemberton with a luridness which perhaps would have

struck a spectator as comically excessive, after he had returned to his little servile room, which looked into a close court where a bare, dirty opposite wall took, with the sound of shrill clatter, the reflection of lighted backwindows. (200)

Pembertonが自分を客観的にとらえる際、彼がふと意識したこの架空の目撃者(a spectator)には、Pembertonをインナーチャイルドとする「大人」の視点が重なるとも考えられるかもしれない。

このようにPembertonには「大人」ではないことに対する恐怖があるのだが、それと同時に存在する「大人」であることの恐怖としては、不誠実で投機的なMoreen家の人々に囲まれて彼らの価値観に染まることを避けたいという思いである。彼の恐怖は次のように描かれる。

He had simply given himself away to a band of adventurers. The idea, the word itself, had a sort of romantic horror for him—he had always lived on such safe lines. (200)

給料をもらうことが当然と思うPembertonの意識の方を変えさせようとするMrs. MoreenのしたたかさはPembertonを怖れさせていると言える。彼女はPembertonに、彼がたいした甲斐もなくほかに仕事もないくせに割の良い給金を請求することが身の程をわきまえない要求であるということ、また、可愛がっている教え子とともに安定した住まいにいられるだけで感謝するべきだということを受容させ受け入れさせようとする。このように自分の義務を無視した提案こそMoreen夫人にとっては「正常」な関係なのであり、彼女の口からは、“To make our relations regular, as it were—to put them on a comfortable footing.” (204) と語られる。Mrs. Moreenの提案を受け入れることは、卑怯な自分達の価値観を臆面もなく正当化しようとする大人の世界への参与を意味することになるので、PembertonはMrs. Moreenが差し出した和解を意味する一時金を受け取ることはない。この拒否は、彼の「大人」の価値観に対する拒否の意思と言えよう。

さらにPembertonはMoreen家の大人達が自ら感じている恐怖を傍観者として感じ取っている。たとえいくらかごまかされ繕われてはいてもいつ経済的な破綻が表面化し、一家が崩壊するのか分からないことをMoreen一家の人々は恐れているのであり、彼ら「大人」の恐怖はPembertonに伝わって次のように描写される。

So Pemberton waited in a queer confusion of yearning and alarm for the catastrophe which was held to hang over the house of Moreen. . . . (221)

上流階級に交わろうとする下心が挫かれ、虚飾が剥ぎ取られて一家が確実に没落への

道筋をたどっていることは、彼らが沈没前の船のイメージによって描写される箇所からも読み取ることができる。以下のような引用が一家の崩壊の様子を裏付ける。

If the family were really at last going to pieces why shouldn't she recognize the necessity of pitching Morgan into some sort of *lifeboat*? (219)

He [Pemberton] could also see that if Mrs. Moreen was trying to get people to take her children she might be regarded as closing the *hatches* for the storm. (222) [*Italics mine*]

大人達が恐れるものは虚飾の崩壊であり、その虚飾を作り上げているものこそ大人の弱さであると言える。そしてこのような大人が持つ弱さが作り出すもののもろさを感じ取り、恐怖するのはまさに大人へと成長してゆく Pemberton なのである。

子供と大人の間代の世代として Pemberton の感じる、「大人」ではないことと、「大人」であることの両方の恐怖は、あらゆる意味で「部外者」となる彼のアイデンティティに対する不安でもあろう。彼は James の作品の人物に共通してみられる疎外感の体現者とも考えられる。Morgan と違って成長し、大人となっていく Pemberton にとって、成長とは大人達の都合に利用されることのないよう、現実にそぐわない純粹さを捨てていくことであるとも考えられる。「大人」になることのアンビバレントな意味、すなわち現実に耐えうる体裁を備えることであると同時に、現実の人間の生がもつ弱さを超越し得る子供が持つ情熱を失うことであるという両面性が、Pemberton によって浮き彫りになる。年齢を重ね成長することの、強さと弱さを同時に備えゆくという進行的および退行的側面を、Pemberton は読者という「大人」のインナーチャイルドとして示唆している。

### III

Morgan は Pemberton の、Pemberton はさらに大人の視点のそれぞれのインナーチャイルドとして、かつて大人が持っていた感性を大人に「教える」声として働いている。二人に教えられる「大人」の視点には、作者 James 自身や読者の視点もまた重なると考えられる。この「大人」の視点に対して、Morgan は瞬間的ではあるが現実に左右されることのない強烈な生命力を、Pemberton は成長する運命を背負って現実を生きていくことの両面価値を、それぞれ想起させる声となっている。

Morgan は病弱であるゆえにいつそう生きることへの欲求が際立ち、周囲の大人達の弱さとは対照的な生命力を感じさせる。James の作品における、大人によって保護されているとは言いがたい子供の一人として、Morgan は決して無力でも受身的な弱さ

を持つ子供でもない。Mary Jane Hurstはフィクションにおける子供の登場人物の意義を、“The development of young characters in a work of fiction must, then, either attach some thematic significance to children or else indicate some special interest by the author in children.”(Hurst, 3) と説明する。つまり、子供の登場人物は作者の子供としての視点、さらに言えば作者のインナーチャイルドそのものの現われとなっていくのではないか。そしてHurstの意見は、Jamesもまた子供の感性に特別な興味を持っていたという本稿の議論を強化してくれるものである。Jamesは子供が非常に限られた自らの能力と環境を限界にとらえることなく、強い生命力を備えることに対して大人が感じる憧憬の気持ちに注目していたのではないだろうか。

子供が大人よりも強い生命力を持ち、それゆえ大人を「教え」、「導く」インナーチャイルドとなるわけは、現実の状況に左右されない純粋な理想と無欲さを備えているためと考えられる。このような子供の強さ—そして同時に大人の弱さ—についてルソーがその「エミール」の中で述べる次のような記述は示唆に富んでいる。

欲望を減らしなさい。そうすればちょうど能力を増したのと同じことになる。すなわち自分の欲し望む以上のことができるものは、あり余る能力を持つことになるからだ。そういう人は確かにきわめて強い存在なのだ。子供時代の第三期の状態がまさにこれだ。

12, 3歳になると子供の諸能力はその欲求よりもはるかに急速に発達する。<sup>6</sup>

一個の人間が、自分の欲する以上のことができるこの過渡期は・・・(その個人が)最大の能力を持つ時期である。<sup>7</sup>

Morganの生きる世界は家庭内に限られ、彼のささやかな楽しみや欲求としては、Pembertonに勉強を教わったり、将来の進学に思いをはせることだけと言える。彼は名誉や快楽を求める大人達の弱さを知らないゆえに鋭い感受性を持ち、彼の鑑識眼は大人達を批判し彼らを気まずくさせる影響を及ぼしていると言えよう。Morganには、大人達の心境を操作し、ときに彼らに不安や反省を喚起するという支配力や影響性を発揮する、James文学における「保護」されない子供が果たす役割の特徴が垣間見られる。こうした子供達は、大人達の価値観に取り込まれる必要がなく自立した印象を備え、また大人達から敬遠されるゆえに孤独なのである。Morganの死は、彼の孤独が解消される未来の希望がないことを意味し、また彼の死によってPembertonもいっそう孤独な立場となる。つまりインナーチャイルドとは、それぞれが分断され独立した感性として大人に訴えかける孤独の声であるとも言える。

Pembertonが感じる孤独は、大人の弱さの意味に示唆を投げかける。MorganとPembertonはそれぞれ、成長することのない者の孤独と成長する者の孤独を体現する

と考えられる。子供のままでいることはないPembertonにとって大人になることは、現実を生きていくために、Morganが備えるような繊細な感性や現実と相容れない理想を捨て、虚飾を求める人間の脆弱さを受け入れることと言える。これが大人の持つ腐敗や弱さと妥協することがないゆえのMorganの孤独と、強い信頼関係をあきらめ利害にとらわれてゆく大人の孤独との違いであろう。そして大人の孤独の深層にある脆弱さを経験することのないMorganの生命力が先鋭化される。つまり、Morganはこの作品の登場人物の中で最も幼く最も短い人生の時間しか与えられない運命を持ちながら、最も「強さ」とそれゆえの影響力を体現する人物となる。そうするとこの作品には、MorganやPembertonをいずれもインナーチャイルドとする第三の「大人」の視点—つまりJames自身でありまた読者すべての視点—から見た、インナーチャイルドが持つ強さへの憧憬や回帰願望が投影されると考えられる。第一のインナーチャイルドであるMorganの死と、それと同時のPembertonのMoreen家における大人でもなく子供でもないという中間的役割の停止、つまり第二のインナーチャイルドの葛藤の終焉は、かつて備えていた感性を分断し、過去の記憶としていった、「大人」がたどる運命をも示唆している。

付記 本論は、九州アメリカ文学会第48回大会(於 西南学院大学 2002年5月11日)において口頭発表したものに基づき、修正を加えたものである。

## 注

1. ロマン主義的な考え方とも言えるが、Jamesの作品におけるいわゆる「保護されない」子供は、大人達の心理を支配さえする威力を持っていると思われる。
2. James, "The Pupil" 192. 以下この作品からの引用は括弧内にページ数を示す。
3. 「フロイトは悪しきものを数多くの多様な精神的錯乱と同一視することができたのである。最も一般的には、悪魔は無意識の抑圧によって生み出される反動的意思を表す。」ラッセル, 392.
4. 斎藤, 89. 参照。
5. ピアジェは人間の精神的な発達を、「基本的には生物の環境への適応, すなわち, 同化と調節という生物学的アナロジーを持った機能として展開する」ところの、個体と外界との関係において、新たな事態に遭遇した時、それに対処することのできるような外界との均衡を目指して認識機能が構造的に変化すると考える。
6. ルソー, 171.
7. ルソー, 172.

参考文献

- Hoy, Helen. “Homotextual Duplicity in Henry James’s ‘The Pupil’” *The Henry James Review* 14 (1993): 34-42.
- Hurst, Mary Jane. *The Voice of the Child in American Literature: Linguistic Approaches to Fictional Child Language*. Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1990.
- James, Henry. *The Portrait of a Lady*. Vols. III and IV of *The Novels and Tales of Henry James*. “New York Edition”; New York: Charles Scribner’s Sons, 1908.
- , “The Pupil.” *Tales of Henry James*. New York: W.W.Norton & Company, 1984.
- , *The Turn of the Screw*. New York: W.W.Norton & Company, 1966.
- , *What Maisie Knew*. Harmondsworth: Penguin Books, 1971.
- Vaid, Krishna Baldev. *Technique in the Tales of Henry James*. Cambridge: Harvard University Press, 1969.
- 斎藤学「アダルトチルドレンと家族」学陽書房, 2000年
- J.B.ラッセル「悪魔の系譜」大瀧啓裕訳, 青土社, 1990年
- ルソー「エミール」永杉喜輔, 宮本文好, 押村襄訳, 玉川大学出版部, 1984年
- 和田修二「教育学大全集22 子どもの人間学」第一法規, S59年